

第4章

学習指導の様子

- 第1節 心がけている授業時間の使い方・進め方、授業方法
- 第2節 授業に取り入れている方法
- 第3節 授業を進めるときの目安となる児童・生徒
(樋田 大二郎)

序章

第1章

第2章

第3章

第4章

第5章

第6章

第7章

第8章

第9章

第10章

第11章

資料編



第1節

心がけている授業時間の使い方・
進め方、授業方法

◇心がけている授業時間の使い方・進め方（1）

教員が授業で心がけていることのベスト・スリーは、「児童・生徒の発言や発表の時間」（小75.1%、中48.0%、以下同）、「練習や演習の時間」（62.3%、50.0%）、「机間指導や児童・生徒に個別に対応する時間」（62.1%、41.9%）である。【Q4-A(教員)】

1) 授業時間配分で心がける
3つのポイント

最初に図4-1-1で、教員に授業時間の使い方
で心がけていることをたずねた結果を紹介する。
質問は「あなたは、教科の授業を進める際にど
のような時間の使い方や進め方を心がけていま
すか」であり、11項目について3段階の選択肢で
回答してもらっている。図に示してある数値は
「多くするように特に心がけている」の値である。

小学校では、第1位が「児童の発言や発表の時
間」の75.1%、第2位が「練習や演習の時間」の
62.3%、つづいてほぼ同じ比率で「机間指導や
児童に個別に対応する時間」の62.1%である。
ここまでがベスト・スリーで、他の項目を大き
く引き離している。

中学校でも第1位が「練習や演習の時間」の
50.0%、第2位が「生徒の発言や発表の時間」の
48.0%、第3位が「机間指導や生徒に個別に対
応する時間」の41.9%である。小学校と同じ3項目
が小学校の場合と同じように他の項目を大きく
引き離してベスト・スリーとなっている。教員
は、「発言や発表」「練習や演習」「個別の対応」

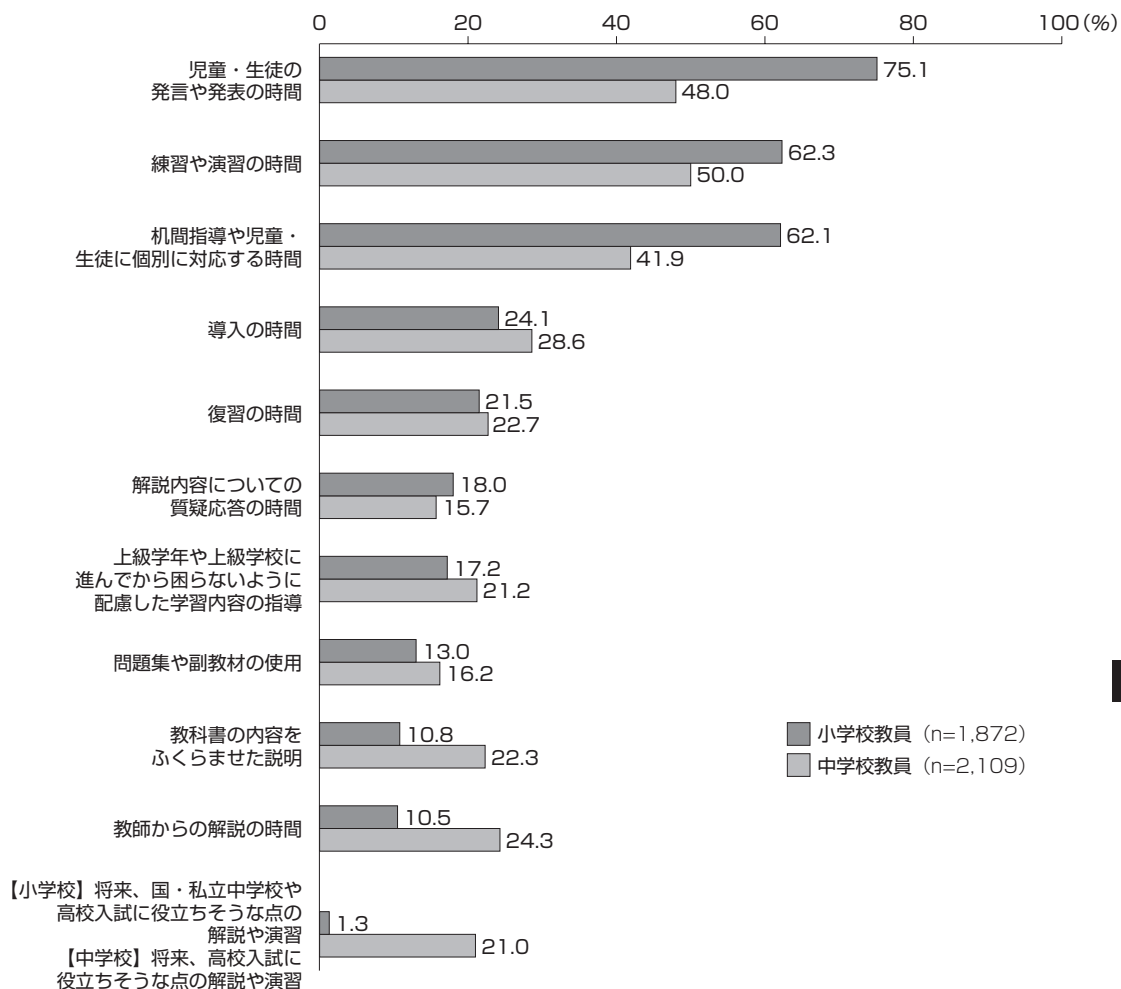
の3つのポイントを多くするように心がけながら
授業を行っている。

2) 中学校教員は小学校教員と比べて、
教科書内容の説明、教師からの解説、
入試に役立ちそうな演習などを心がけている

同じ図4-1-1で、上述の3つのポイントについ
て、小学校と中学校でどちらが心がけている比
率が高いか比較すると、いずれの項目でも、中
学校よりも小学校のほうが比率が高い。

これに対して、中学校のほうが小学校よりも
心がけている比率が高い項目はベスト・スリー
以外の項目であり「教師からの解説の時間」（小
10.5%、中24.3%、以下同）、「将来、高校入試に
役立ちそうな点の解説や演習」（1.3%、21.0%）、
「教科書の内容をふくらませた説明」（10.8%、
22.3%）、「上級学年や上級学校に進んでから困
らないように配慮した学習内容の指導」（17.2%、
21.2%）などである。教科書内容の説明や教師
からの解説あるいは入試や進学後の学力に関連
する項目であった。

図4-1-1 心がけている授業時間の使い方・進め方（小・中学校教員）



注) 数値は「多くするように特に心がけている」の%。

◇心がけている授業時間の使い方・進め方（2）

小学校では「児童の発言や発表の時間」は3回の調査を通じて高い値を継続している。中学校では「生徒の発言や発表の時間」と「机間指導や生徒に個別に対応する時間」が大きく割合を減らしている。【Q4-A(教員)】

1) 小学校では「導入の時間」「復習の時間」「解説内容についての質疑応答の時間」などが減少

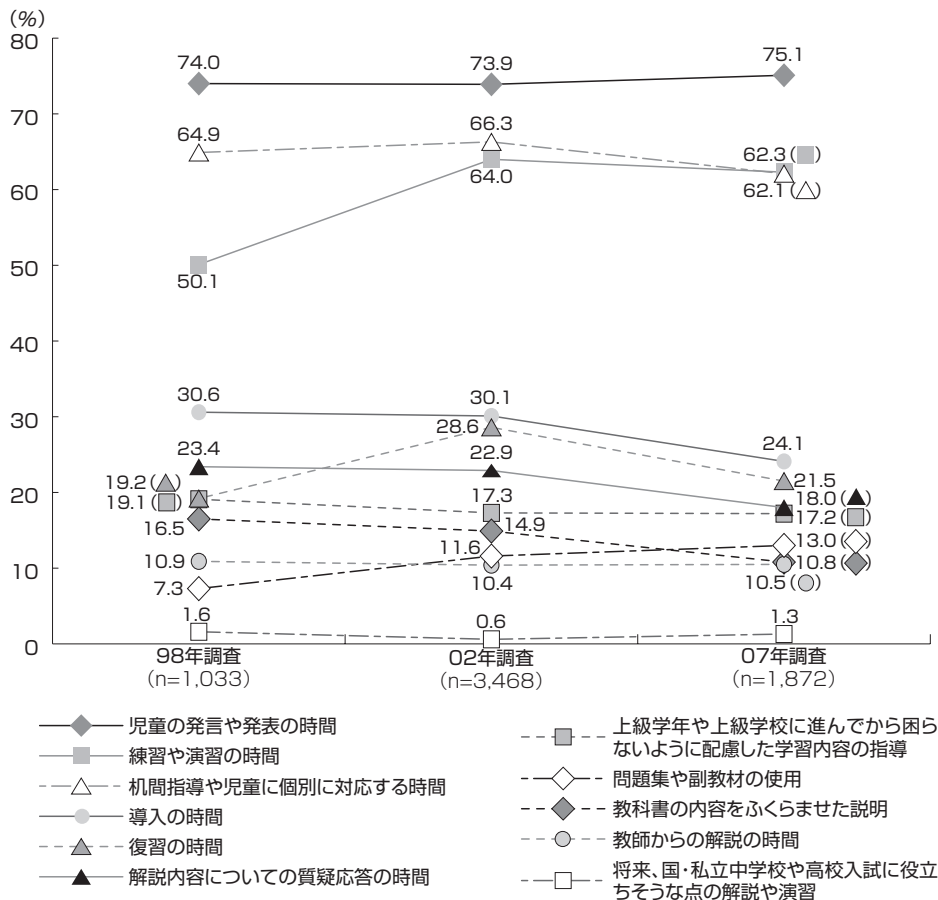
授業時間の使い方では「多くするように特に心がけている」項目は大きく変化している。まず、図4-1-2を用いて小学校教員が心がけていることの変化をみてみよう。

まず、1998年の学習指導要領告示の直前に実施された98年調査から、『学びのすすめ』（2002年

1月）の「確かな学力」を経て現行学習指導要領が実施（2002年4月）された年の秋に行われた02年調査にかけての4年間で、「練習や演習の時間」が50.1%から64.0%へと13.9ポイント、「復習の時間」が19.2%から28.6%へと9.4ポイント増加した。これらは基礎学力の定着を目指した伝統回帰的傾向とみることができる。

しかし、02年調査から07年調査にかけて再び

図4-1-2 心がけている授業時間の使い方・進め方の変化（小学校教員／経年比較）



注) 数値は「多くするように特に心がけている」の%。

変化が起きる。「導入の時間」(02年調査30.1%→07年調査24.1%、以下同)、「復習の時間」(28.6%→21.5%)、「解説内容についての質疑応答の時間」(22.9%→18.0%)、「教科書の内容をふくらませた説明」(14.9%→10.8%)の各項目の比率が下がった。「練習や演習の時間」もわずかが下がっている。つまり、「確かな学力」が提唱され、現行学習指導要領が実施されてから、伝統回帰的な授業要素を心がける割合が減少したのである。

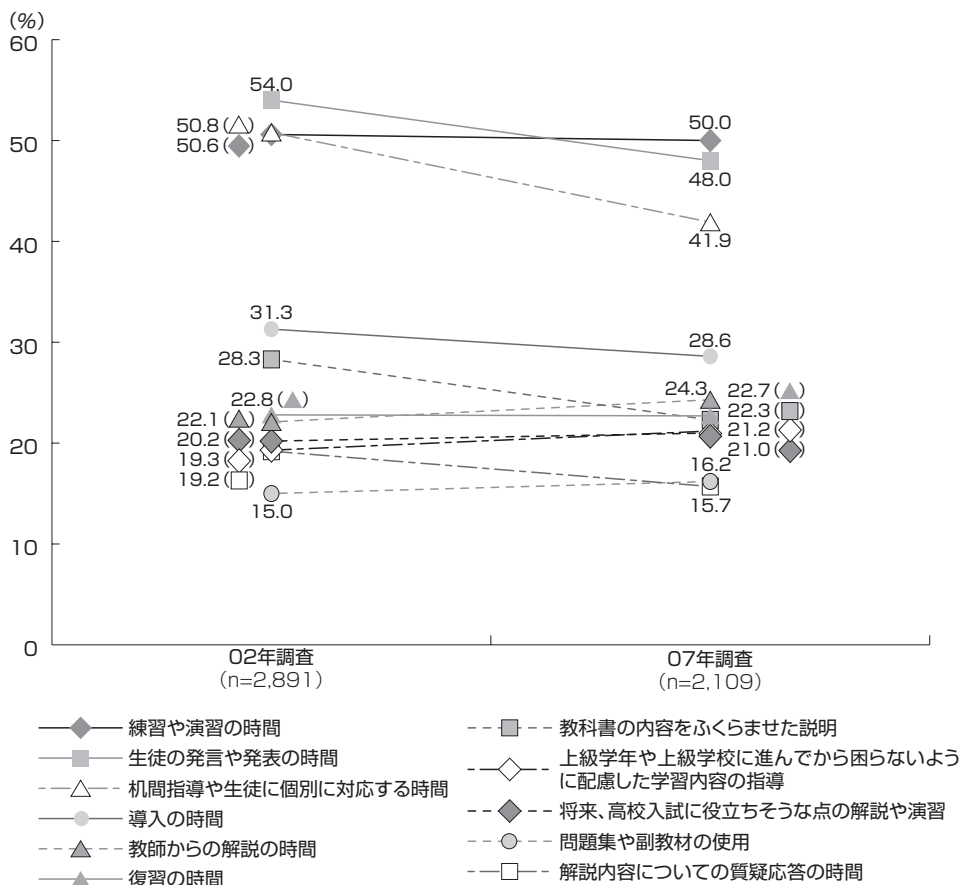
なお、同じ図で「児童の発言や発表の時間」は、3回の調査を通じて98年調査74.0%→02年調査73.9%→07年調査75.1%とベスト・スリーのなかでも他を離して安定して第1位である。

2) 中学校では「生徒の発言や発表の時間」「机間指導や生徒に個別に対応する時間」が減少

次に、図4-1-3で中学校教員が心がけている時間の使い方の変化をみてみよう。中学校教員については、97年調査ではこの項目の質問はしていないので、02年調査と07年調査の比較になる。

ベスト・スリーのうち、「生徒の発言や発表の時間」(02年調査54.0%→07年調査48.0%、以下同)と「机間指導や生徒に個別に対応する時間」(50.8%→41.9%)が大きく割合を減らしている。このほか、「教科書の内容をふくらませた説明」(28.3%→22.3%)と「解説内容についての質疑応答の時間」(19.2%→15.7%)もやや割合を減らしている。

図4-1-3 心がけている授業時間の使い方・進め方の変化(中学校教員/経年比較)



注) 数値は「多くするように特に心がけている」の%。

◇心がけている授業方法（1）

小・中学校ともに「表現活動を取り入れた授業」など体験的・問題解決的な項目と同時に「計算や漢字などの反復的な練習」など基礎学力重視の項目が上位に入っている。しかし、「表現活動を取り入れた授業」と「自分で調べることを取り入れた授業」は減少傾向にある。 【Q4-B(教員)】

1) 体験的・問題解決的な授業方法を多くするように心がけている

本項を展開する前に、簡単に「確かな学力」についておさらいをしたい。

文部科学省（以下、文科省）がいう「確かな学力」には2つの主要な柱がある。文科省ホームページによると「確かな学力」とは「知識や技能」、およびこれに加えて、「学ぶ意欲や自分で課題を見付け、自ら学び、主体的に判断し、行動し、よりよく問題解決する資質や能力等」まで含めた学力であるとしている（出典：文科省ホームページより）。

さらに文科省は新学習指導要領のねらいとポイントのなかで、「体験的・問題解決的な学習」に取り組み、これによって「思考力、判断力、表現力などを養う」ことを求めている（出典：文科省ホームページより）。

ここでは、文科省がいう「学ぶ意欲や自分で課題を見付け、自ら学び、主体的に判断し、行動し、よりよく問題解決する資質や能力」や「思考力、判断力、表現力」を仮に「体験的・問題解決的な学力」と呼ぶことにする。

これら「知識や技能」と「体験的・問題解決的な学力」という「確かな学力」の2つの柱の観点から図4-1-4をみると、非常に興味深いことが

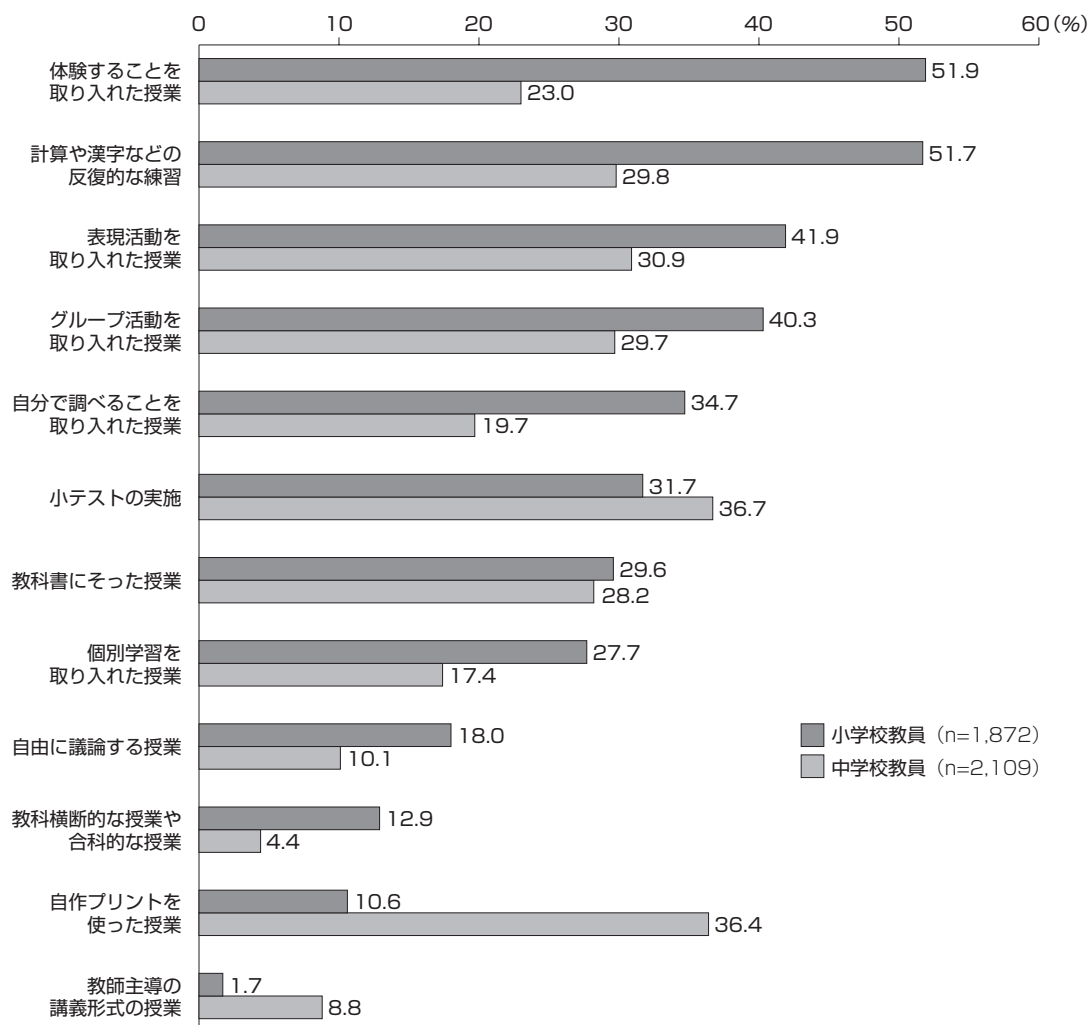
わかる。

まず、小学校では上位4つのなかに「体験することを取り入れた授業」が51.9%、「表現活動を取り入れた授業」が41.9%、「グループ活動を取り入れた授業」が40.3%と「体験的・問題解決的な学力」を充実するための授業方法が3つ入っている。しかし、これと同時に、「確かな学力」のもう1つの柱である「知識や技能」を充実するための「計算や漢字などの反復的な練習」も51.7%と上位4つのなかに入っている。小学校では、おおむね「確かな学力」が心がけられている、といえるのではないかな。

次に、中学校では「小テストの実施」が36.7%で第1位。「自作プリントを使った授業」が36.4%で第2位。第3位以下は僅差で、「表現活動を取り入れた授業」が30.9%、「計算や漢字などの反復的な練習」が29.8%、「グループ活動を取り入れた授業」が29.7%であった。

同じ図で低い値だった項目に注目すると、小・中学校ともに、伝統的な授業の象徴ともいえる「教師主導の講義形式の授業」が低い値になっている。またすでに「総合的な学習の時間」の授業があるせいなのか、「教科横断的な授業や学科的な授業」も小・中学校ともに低い値になっている。

図4-1-4 心がけている授業方法（小・中学校教員）



注) 数値は「多くするように特に心がけている」の%。

2) 小・中学校ともに「表現活動を取り入れた授業」「自分で調べることを取り入れた授業」が減少

表4-1-1は、小学校教員が「多くするように特に心がけている」授業方法の経年変化をみたものである。

この表で、02年調査から07年調査にかけての変化をみると、大半の項目で値が減っていることが第一の特徴である。

とくに減少幅が大きいのは「体験することを取り入れた授業」(02年調査64.6%→07年調査51.9%、以下同)、「表現活動を取り入れた授業」

(55.1%→41.9%)、「自分で調べることを取り入れた授業」(54.3%→34.7%)などであり、ゆとり路線的な授業方法は、上位にはあるものの、その割合は大きく減少していることがわかる。

表4-1-2は中学校についての経年変化をみたものである。増加した項目は、「小テストの実施」(32.4%→36.7%)、「自作プリントを使った授業」(32.2%→36.4%)、「教科書にそった授業」(22.5%→28.2%)である。一方減少した項目は「表現活動を取り入れた授業」(39.3%→30.9%)や「自分で調べることを取り入れた授業」(27.3%→19.7%)であり、10ポイント近く減少している。

表4-1-1 心がけている授業方法の変化(小学校教員/経年比較)

(%)

	98年調査 (n=1,033)	02年調査 (n=3,468)	07年調査 (n=1,872)
体験することを取り入れた授業	63.1	64.6	51.9
計算や漢字などの反復的な練習		55.0	51.7
表現活動を取り入れた授業	56.1	55.1	41.9
グループ活動を取り入れた授業	43.5	46.4	40.3
自分で調べることを取り入れた授業	44.8	54.3	34.7
小テストの実施		30.7	31.7
教科書にそった授業	14.8	25.7	29.6
個別学習を取り入れた授業	34.0	31.2	27.7
自由に議論する授業	24.1	21.4	18.0
教科横断的な授業や合科的な授業 ※	16.0	21.5	12.9
自作プリントを使った授業	14.8	9.9	10.6
教師主導の講義形式の授業	0.8	1.3	1.7

注1) 数値は「多くするように特に心がけている」の%。

注2) ※は98年調査では「教科の枠をこえた授業」とたずねている。

表4-1-2 心がけている授業方法の変化（中学校教員／経年比較）(%)

	02年調査 (n=2,891)	07年調査 (n=2,109)
小テストの実施	32.4	36.7
自作プリントを使った授業	32.2	36.4
表現活動を取り入れた授業	39.3	30.9
計算や漢字などの反復的な練習	27.9	29.8
グループ活動を取り入れた授業	28.2	29.7
教科書にそった授業	22.5	28.2
体験することを取り入れた授業	22.3	23.0
自分で調べることを取り入れた授業	27.3	19.7
個別学習を取り入れた授業	20.8	17.4
自由に議論する授業	12.3	10.1
教師主導の講義形式の授業	4.9	8.8
教科横断的な授業や合科的な授業	5.1	4.4

注) 数値は「多くするように特に心がけている」の%。

◇心がけている授業方法（2）

中学校では教員が担当する教科によって心がけている授業方法が大きく異なっている。「表現活動を取り入れた授業」では、外国語で61.1%と6割を超え、国語も45.9%と4割を超えている。

【Q4-B(教員)】

1) 数学は「表現活動を取り入れた授業」や「自分で調べることを取り入れた授業」が低い値

図4-1-5は中学校教員の担当教科別に「多くするように特に心がけている」授業方法をみたものである。教員が担当する教科によって心がけている授業方法が大きく異なっている。いくつかの特徴的な傾向をみてみたい。

最初に、前項でみたように02年調査から07年調査にかけて割合を減らした「表現活動を取り入れた授業」「自分で調べることを取り入れた授業」の2項目についてみると、「表現活動を取り入れた授業」では、外国語が61.1%と6割を超え、国語も45.9%と4割を超えているが、その他の教科では社会が21.1%、理科が18.4%と2割前後、そして数学は11.8%と1割強にとどまっている。

また「自分で調べることを取り入れた授業」では、社会が36.2%と4割近い値になっているものの、その他の教科では理科が24.1%、国語が23.8%とそれぞれ2割台、外国語は8.9%、数学は7.9%で1割未満であった。

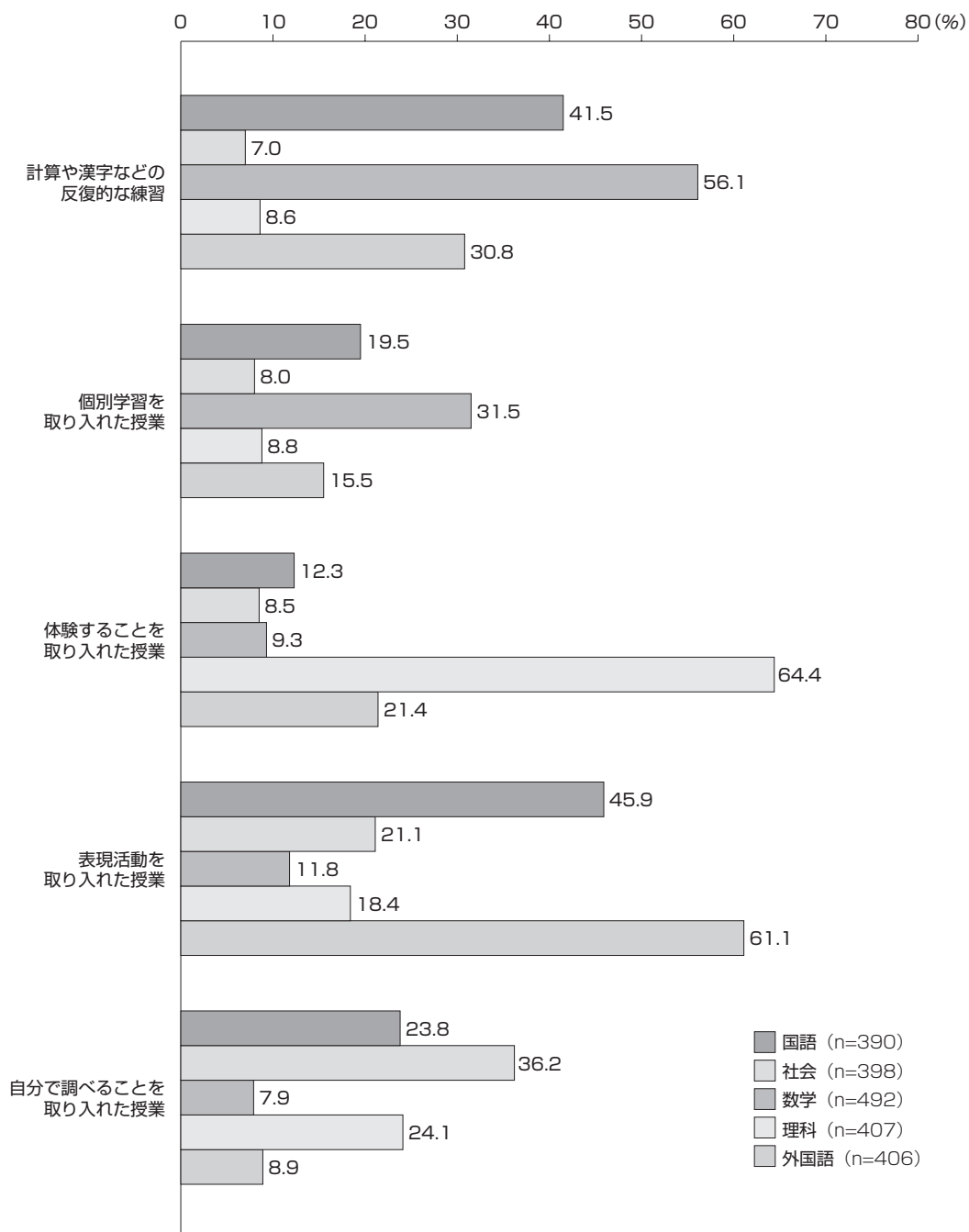
2) 理科は「体験することを取り入れた授業」を心がけている

次に、文科省が提唱している授業方法（前項 p.66参照）の1つである「体験することを取り入れた授業」についてはどうであろうか。理科が64.4%と非常に高い値になっている。第2位は外国語が21.4%、そして第3位以下はおよそ1割で、国語12.3%、数学9.3%、社会8.5%と続いている。

3) 数学は「計算や漢字などの反復的な練習」「個別学習を取り入れた授業」を心がけている

ところでこれまでみた3つの項目では、数学を担当している教員の回答割合がいずれも低かった。それでは数学を担当している教員はどのような授業方法を心がけているのだろうか。同じ図4-1-5から他の教科の教員よりも「計算や漢字などの反復的な練習」（56.1%）「個別学習を取り入れた授業」（31.5%）を心がける比率が高いことがわかる。

図4-1-5 心がけている授業方法（中学校教員／担当教科別）



注1) 数値は「多くするように特に心がけている」の%。

注2) 12項目中5項目を抜粋。

第2節

授業に取り入れている方法

◇授業に取り入れている方法（1）

.....

小学校の授業ではさまざまな方法上の工夫が用いられている。算数の授業では「チームティーチング」「少人数指導」など児童をグルーピングするタイプの指導方法を取り入れる割合が他の教科よりも飛び抜けて高くなっている。【Q5(教員)】

.....

表4-2-1は、小学校教員にどのような授業の工夫を用いているかたずねた結果である。質問は「あなたは、教科の授業において、次のような方法を用いていますか」であり、16項目について教科ごとに実施しているかたずねている（中学校教員に対してはそれぞれが担当する教科について回答してもらっている）。

伝統的な授業のイメージは「チョーク・アンド・トーク」、すなわち板書をして説明をする一斉授業である。だがこの表から、現在、小学校ではさまざまな授業の工夫が用いられていることがわかる。また、教科ごとにその工夫のしかたが異なっている。いくつかの特徴的な傾向を紹介する。

1) 算数はグルーピングする指導方法の実施率が高い

まず、算数の授業では「個別学習」(84.6%)および「チームティーチング」(55.1%)、「少人数指導」(52.8%)、「習熟度別指導」(44.9%)といった児童をグルーピングするタイプの指導方法を取り入れる割合が他の教科よりも飛び抜けて高くなっている。

2) 算数と国語は「市販プリントを用いての学習」「自作プリントを用いての学習」の実施率が高い

次に、「市販テスト（業者テスト）の利用」が生活以外の教科でいずれも8割台から9割台に達しており、非常に高い値になっているが、生活では3.8%にとどまっている。

これに対して、同じ「市販」でも、「市販プリントを用いての学習」は、教科ごとに実施率が異なっている。算数は78.8%と8割近い実施率である。そして国語は67.6%と7割近い。これに対して、社会は34.6%、理科は33.8%、生活は11.5%となっている。

また「自作プリントを用いての学習」では、算数が72.3%、国語が68.1%と高い値になっている。

3) 社会と生活は体験的な指導方法が高い割合で用いられている

社会と生活は、体験的な指導方法である「学校外の施設・センターなどを利用した学習」(社会67.4%、生活61.9%、以下同)、「学校外の現場・フィールドでの体験的方法による学習」(73.5%、88.7%)、「学校内での体験的方法によ

る学習（体験学習）」(49.9%、93.8%) などが高い割合で用いられている。さらに、「児童にテーマを選ばせて行う学習（テーマ学習）」(61.3%、46.7%)、「児童に課題やテーマを与えて行う調べ学習」(82.0%、61.3%) も高い割合で行われて

いる。

なお、理科では「学校内での体験的方法による学習（体験学習）」(71.2%)、「学校外の現場・フィールドでの体験的方法による学習」(41.3%) の実施率が高くなっている。

表4-2-1 授業での指導方法の工夫（小学校教員）

(%)

	国語	社会	生活	算数	理科
児童にテーマを選ばせて行う学習（テーマ学習）	29.3	61.3	46.7	3.0	23.5
児童に課題やテーマを与えて行う調べ学習	43.6	82.0	61.3	15.1	48.9
学校内での体験的方法による学習（体験学習）	13.3	49.9	93.8	28.4	71.2
学校外の現場・フィールドでの体験的方法による学習	3.9	73.5	88.7	2.4	41.3
学校外の施設・センターなどを利用した学習	4.7	67.4	61.9	0.5	17.5
コンピュータを使った学習	25.9	67.3	31.1	24.4	48.3
インターネットを利用した学習	13.8	77.3	16.8	4.2	45.3
ディベート・討論を取り入れた学習	53.5	23.3	3.8	7.9	7.1
個別学習	50.7	19.8	11.9	84.6	12.8
社会人講師・地域の人材による授業	3.3	49.4	61.3	0.9	7.6
自作プリントを用いての学習	68.1	45.6	37.1	72.3	31.1
市販プリントを用いての学習	67.6	34.6	11.5	78.8	33.8
市販テスト（業者テスト）の利用	92.6	86.0	3.8	91.3	90.5
チームティーチング	8.4	3.5	17.7	55.1	6.0
少人数指導	5.0	1.0	4.0	52.8	1.7
習熟度別指導	2.9	0.1	0.3	44.9	0.2

注1) 複数回答。

注2) この設問は、3～6年生担任の教員は「国語」「算数」「社会」「理科」、1～2年生担任の教員は「国語」「算数」「生活」の教科すべてを担当している教員のみ回答して算出している。ここでの数値は、「国語」「算数」は1～6年生担任の1,478名、「社会」「理科」は3～6年生担任の896名、「生活」は1～2年生担任の582名を母数として算出している。このため、巻末基礎集計表（教員調査）と値が異なっている。

注3) 網掛け部分は本項の本文中で取り上げている数値を示す。

◇授業に取り入れている方法（2）

小学校の授業での指導方法の工夫を教科ごとに5つの項目についてみたところ、理科では「体験学習」の実施率が高いのが特徴で、「調べ学習」や「インターネットの利用」もおよそ半数の教員が実施している。「市販プリント」は3分の1の教員が用いている。

【Q5(教員)】

図4-2-1に示した5つのレーダー・チャートは、小学校教員の教科ごとにみた授業方法の工夫の状況である。ここでは、前項でみた表4-2-1の16項目について文科省が提唱する学習のなかから、①問題解決的な学習の例として「児童に課題やテーマを与えて行う調べ学習」＝以下「調べ学習」、②体験的な学習の例として「学校内での体験的方法による学習（体験学習）」＝以下「体験学習」、③個に応じた指導の例として「少人数指導」の3つを取り上げ^{*}、これらに加えて、④ニューメディア利用の例として「インターネットを利用した学習」＝以下「インターネットの利用」、⑤業者作成の教材の利用の例として「市販プリントを用いての学習」＝以下「市販プリントの利用」の5つの項目を取り出して各教科の特徴を図にしたものである。

1) 国語では「市販プリントの利用」が多く、社会と生活では「体験学習」と「調べ学習」が多い

まず、国語の授業からみると、「市販プリントの利用」(67.6%)と「調べ学習」(43.6%)が多いのが特徴である。これに対して「インターネットの利用」(13.8%)、「体験学習」(13.3%)、「少人数指導」(5.0%)は少ない。

社会では、「調べ学習」(82.0%)が8割を超え、「インターネットの利用」(77.3%)も8割近い実施率である。また、「体験学習」(49.9%)も5割近く、社会は活動的要素の多い教科となってい

る。「少人数指導」(1.0%)はほとんど行われていない。

生活は、社会同様に活動的要素が多い教科であり、「体験学習」(93.8%)、「調べ学習」(61.3%)が高い実施率である。しかし、指導する学年が小1～小2生と低いせいか「インターネットの利用」(16.8%)の割合は低い。また、「市販プリントの利用」(11.5%)や「少人数指導」(4.0%)の割合も低い。

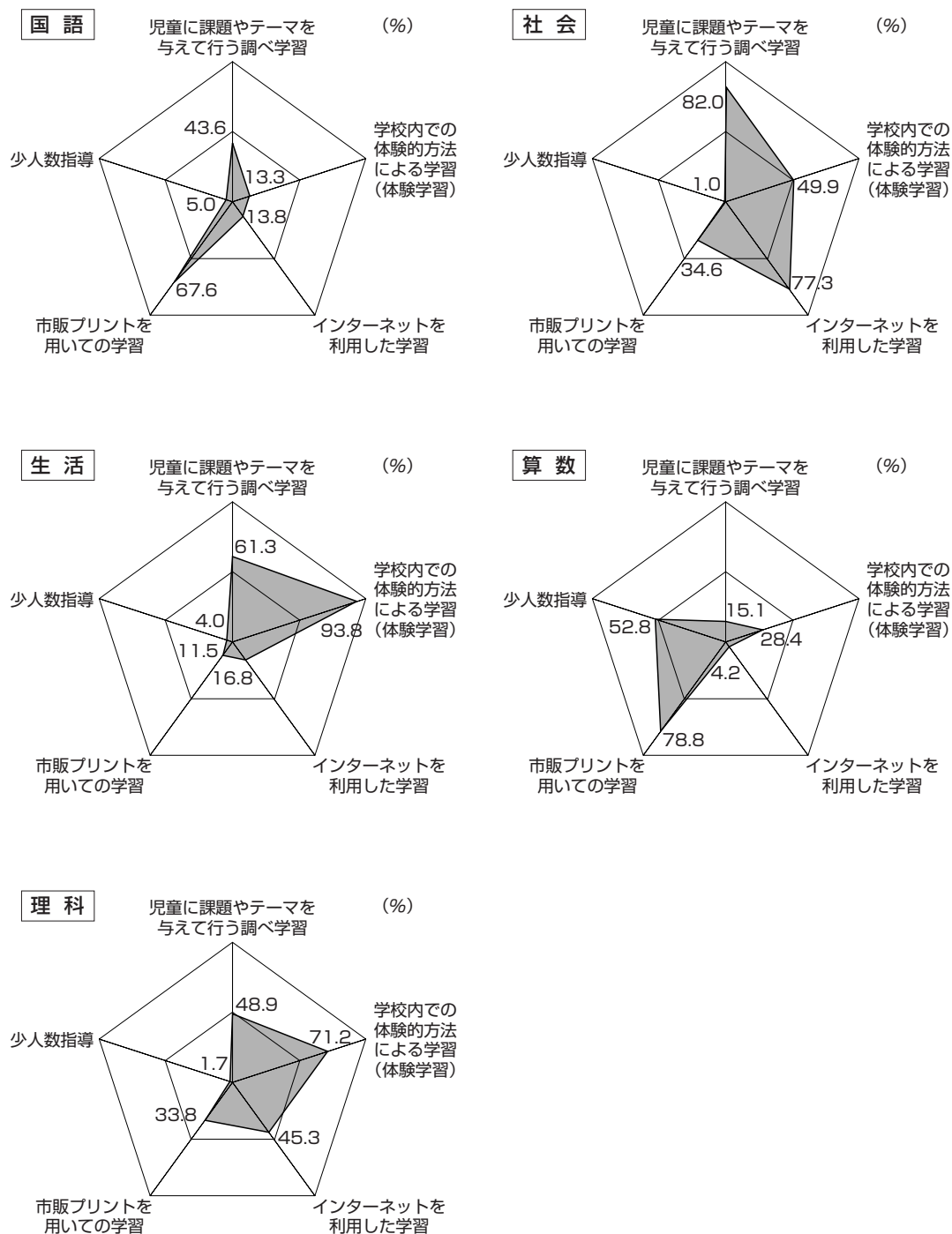
2) 算数は「少人数指導」が多いのが特徴、理科は「体験学習」が多いのが特徴

算数は、「市販プリントの利用」(78.8%)の割合が高い。(ただし、前項でみたように、業者作成教材に頼りきっているわけではなく、「自作プリントを用いての学習」も72.3%と高い)。また「少人数指導」(52.8%)も多く行われている。しかし、「体験学習」(28.4%)はあまり実施されていないし、「調べ学習」(15.1%)、「インターネットの利用」(4.2%)の割合も低い。

最後に理科では、「体験学習」(71.2%)の実施率が高いのが特徴である。また、「調べ学習」(48.9%)や「インターネットの利用」(45.3%)もおよそ半数の教員が実施している。「市販プリントの利用」(33.8%)は3分の1の教員が実施している。そして、「少人数指導」(1.7%)はほとんど実施されていない。

^{*}文部科学省HP参照。

図4-2-1 授業での指導方法の工夫（小学校教員）



注1) 複数回答。

注2) 16項目中5項目を抜粋。

注3) この設問は、3～6年生担任の教員は「国語」「算数」「社会」「理科」、1～2年生担任の教員は「国語」「算数」「生活」の教科すべてを担当している教員のみ回答して算出している。ここでの数値は、「国語」「算数」は1～6年生担任の1,478名、「社会」「理科」は3～6年生担任の896名、「生活」は1～2年生担任の582名を母数として算出している。このため、巻末基礎集計表（教員調査）と値が異なっている。

◇授業に取り入れている方法 (3)

中学校では、授業での指導方法の工夫がこの10年間であまり変わっていないのが特徴である。また、中学校では指導方法の工夫のパターンが、国語・社会・理科のグループと数学・外国語の2つのグループに分かれている。 【Q5(教員)】

1) 中学校では、プリントの利用と個に応じた指導がさかに行われている

図4-2-2は、中学校での授業での指導方法の工夫の変化をみたものである。まず、最初に07年調査の結果をみてみよう。16項目中、実施率の多かったもの（実施率35%以上）を並べると以下ようになる。

- ①「自作プリントを用いての学習」88.1%
- ②「個別学習」67.9%
- ③「市販プリントを用いての学習」59.6%
- ④「生徒に課題やテーマを与えて行う調べ学習」58.0%
- ⑤「市販テスト（業者テスト）の利用」44.2%
- ⑥「チームティーチング」38.3%
- ⑦「少人数指導」37.0%

上位7項目中に、「自作プリントを用いての学習」と「市販プリントを用いての学習」のプリントの利用に関する工夫が2つ入っている。また「個別学習」「チームティーチング」「少人数指導」の個に応じた指導が3つ入っている。中学校の授業の工夫はプリントの利用と個に応じた指導の2つがさかに行われている。

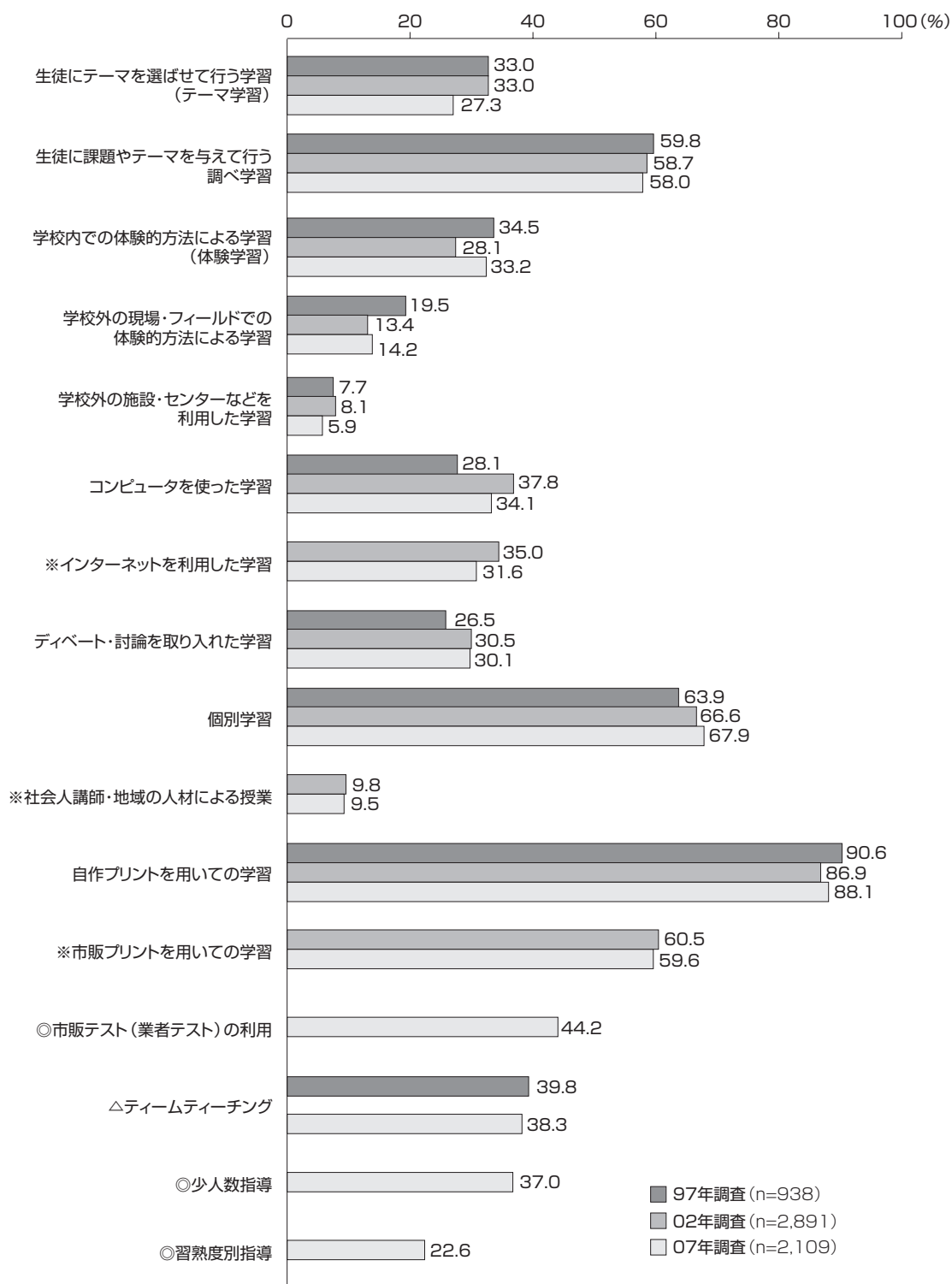
次に、97年調査の結果と比較してみよう。97年調査は10項目しかたずねていないが、35%以上の実施率だったものを並べると次のようになる。

- ①「自作プリントを用いての学習」90.6%
- ②「個別学習」63.9%
- ③「生徒に課題やテーマを与えて行う調べ学習」59.8%
- ④「チームティーチング」39.8%

97年調査で35%以上の実施率だった指導方法はすべて07年調査でも35%以上の実施率であることがわかる。

最後に同じ図で実施率の変化があった項目に着目すると、「個別学習」（97年調査63.9%→02年調査66.6%→07年調査67.9%、以下同）が徐々に増加している。「コンピュータを使った学習」（28.1%→37.8%→34.1%）は02年調査で実施率が大きく伸びたが、07年調査でやや下がっている。「学校外の現場・フィールドでの体験的方法による学習」（19.5%→13.4%→14.2%）の実施率は97年調査から02年調査にかけて減少し、そのままの水準にとどまっている。

図4-2-2 授業での指導方法の工夫の変化（中学校教員／経年比較）



注1) 数値は「はい」と回答した%。

注2) ※は97年調査ではたずねていない。△は02年調査ではたずねていない。◎は97年調査、02年調査ではたずねていない。

2) 中学校では指導方法の工夫のパターンが、 国語・社会・理科のグループと数学・外国 語のグループ2つに分かれている

表4-2-2は、中学校の担当教科別に授業での指導方法の工夫をみたものである。16項目の指導方法のうち、実施率（「はい」と回答した%）が50%以上のものと20%以下のものを表にしている。

この表で、興味深いのは指導方法の工夫のしかたが、国語・社会・理科のグループと数学・外国語の2つのグループに分かれていることである。

最初に「自作プリントを用いての学習」と「個別学習」の実施率からみると、5教科すべてで5割を超えている。また、「市販プリントを用いての学習」も社会以外の4教科は、5割を超えてい

る。

しかし、「生徒に課題やテーマを与えて行う調べ学習」では、国語・社会・理科グループが5割を超えているのに対して、数学（24.2%）・外国語（39.7%）グループは5割を切っている。反対に、「少人数指導」の実施率では、国語・社会・理科グループが2割以下なのに対して数学・外国語グループは5割を超えている。

さらに、「習熟度別指導」の実施率でも、国語・社会・理科グループが2割以下なのに対して、数学・外国語グループは2割より多く5割未満になっている（数学49.2%、外国語32.0%）。

以上述べた指導方法の工夫の実施率のパターンをまとめると表4-2-3のようになる。

表4-2-2 授業での指導方法の工夫（中学校教員／担当教科別）（実施率50%以上と20%以下の項目）
（%）

	実施率50%以上		実施率20%以下	
国語 (n=390)	自作プリントを用いての学習	94.1	少人数指導	17.9
	生徒に課題やテーマを与えて行う調べ学習	81.5	チームティーチング	16.9
	個別学習	77.4	習熟度別指導	11.3
	ディベート・討論を取り入れた学習	65.1	社会人講師・地域の人材による授業	7.9
	市販プリントを用いての学習	56.7	学校外の現場・フィールドでの体験的方法による学習	6.9
			学校外の施設・センターなどを利用した学習	5.6
社会 (n=398)	自作プリントを用いての学習	86.2	学校外の施設・センターなどを利用した学習	14.1
	生徒に課題やテーマを与えて行う調べ学習	84.7	少人数指導	9.8
	インターネットを利用した学習	58.0	チームティーチング	7.3
	個別学習	54.5	習熟度別指導	5.3
数学 (n=492)	自作プリントを用いての学習	84.3	学校内での体験的方法による学習（体験学習）	16.3
	個別学習	80.1	インターネットを利用した学習	10.8
	少人数指導	70.5	ディベート・討論を取り入れた学習	10.8
	市販プリントを用いての学習	60.2	生徒にテーマを選ばせて行う学習（テーマ学習）	4.7
	チームティーチング	54.3	学校外の現場・フィールドでの体験的方法による学習	2.8
			社会人講師・地域の人材による授業	1.8
			学校外の施設・センターなどを利用した学習	1.4
理科 (n=407)	自作プリントを用いての学習	82.6	少人数指導	19.9
	学校内での体験的方法による学習（体験学習）	76.9	ディベート・討論を取り入れた学習	17.2
	生徒に課題やテーマを与えて行う調べ学習	68.6	習熟度別指導	7.9
	市販プリントを用いての学習	67.1	社会人講師・地域の人材による授業	7.6
	個別学習	53.6	学校外の施設・センターなどを利用した学習	6.4
外国語 (n=406)	自作プリントを用いての学習	94.1	生徒にテーマを選ばせて行う学習（テーマ学習）	19.2
	チームティーチング	85.7	コンピュータを使った学習	18.2
	個別学習	71.2	インターネットを利用した学習	17.7
	市販プリントを用いての学習	64.8	社会人講師・地域の人材による授業	10.6
	少人数指導	58.1	学校外の現場・フィールドでの体験的方法による学習	8.1
			学校外の施設・センターなどを利用した学習	3.0

注) 数値は「はい」と回答した%。

表4-2-3 授業での指導方法の工夫の実施率パターン（中学校教員／担当教科別）

	国語	社会	数学	理科	外国語
自作プリントを用いての学習	△	△	△	△	△
個別学習	△	△	△	△	△
市販プリントを用いての学習	△	—	△	△	△
生徒に課題やテーマを与えて行う調べ学習	△	△	—	△	—
少人数指導	▼	▼	△	▼	△
習熟度別指導	▼	▼	—	▼	—

注) △印：実施率50%以上、▼印：実施率20%以下、—印：実施率20%より多く50%未満。

第3節

授業を進めるときの
目安となる児童・生徒

この9年間で、授業を進める目安となるグループが「中の下位」～「下位」と回答した小学校教員の割合が9.1ポイントも減少している。中学校の社会では7割強の教員が「中位」以上の理解度の生徒を目安にしている。 【Q6(教員)】

1) 小・中学校とも5割以上の教員は、「中の下位」～「下位」の児童・生徒が理解しないまま授業を進めている可能性がある

授業を進めるときの目安となる児童・生徒はステアリング・グループと呼ばれる。図4-3-1は、ステアリング・グループが、どのくらいの理解度の児童・生徒であるかたずねた結果である。質問は「授業を進めるときの目安としている児童・生徒についてうかがいます。あなたは、どのくらいの理解度の児童・生徒を目安にして授業を進めていますか」である。

この質問はいわゆる「落ちこぼし」にかかわる質問であるが、小学校では「下位」が5.3%、「中の下位」が39.6%、これらを合計しても44.9%にとどまる。中学校では「下位」が2.0%、「中の下位」が35.5%、これらを合計しても37.5%で5割に届かない。小学校は中学校よりも理解度の低い児童を目安にしている傾向があるとはいえ、小・中学校とも5割以上の教員が理解度「中位」以上の児童・生徒をステアリング・グループにしており、理解度の低い児童・生徒が授業内容を理解する前に授業が進んでしまっている可能性が示唆されている。

2) 小学校ではステアリング・グループが「中の下位」～「下位」である割合が9年間で9.1ポイントも減少

図4-3-2は、ステアリング・グループの経年変化をみたものである。小学校では98年調査と

比べて07年調査はステアリング・グループの理解度レベルが高くなっていることがわかる。98年調査では「下位」が6.0%、「中の下位」が48.0%、合計して54.0%であったのが、07年調査では「下位」が5.3%、「中の下位」が39.6%、合計して44.9%に減っている。ステアリング・グループが「中の下位」～「下位」と回答した小学校教員の割合が9.1ポイントも減少している。

これに対して中学校ではあまり変化がなく、97年調査は「下位」が2.9%、「中の下位」が36.6%、合計して39.5%、07年調査は「下位」が2.0%、「中の下位」が35.5%、合計して37.5%であった。

3) 中学校では社会でステアリング・グループが高めに設定されている

最後に図4-3-3を用いて、中学校教員の担当教科ごとにステアリング・グループの理解度レベルの違いをみてみよう。

この図では、あらかじめ理解度「上位～中位」と「中の下位～下位」の2つのカテゴリーにまとめている。この図をみると「中の下位～下位」の理解度の生徒を目安にする割合がもっとも高いのは数学(50.6%)であることがわかる。以下、理科41.3%、外国語35.5%、国語31.3%の順でもっとも低いのは社会26.4%であった。中学校の社会では7割強のクラスで「中の下位～下位」の理解度の生徒が理解しないまま授業が進められている可能性がある。

図4-3-1 授業を進めるときの目安となる児童・生徒（小・中学校教員）

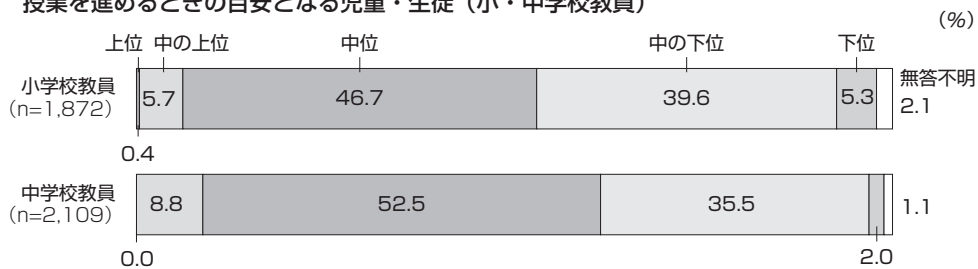


図4-3-2 授業を進めるときの目安とする児童・生徒の変化（小・中学校教員／経年比較）

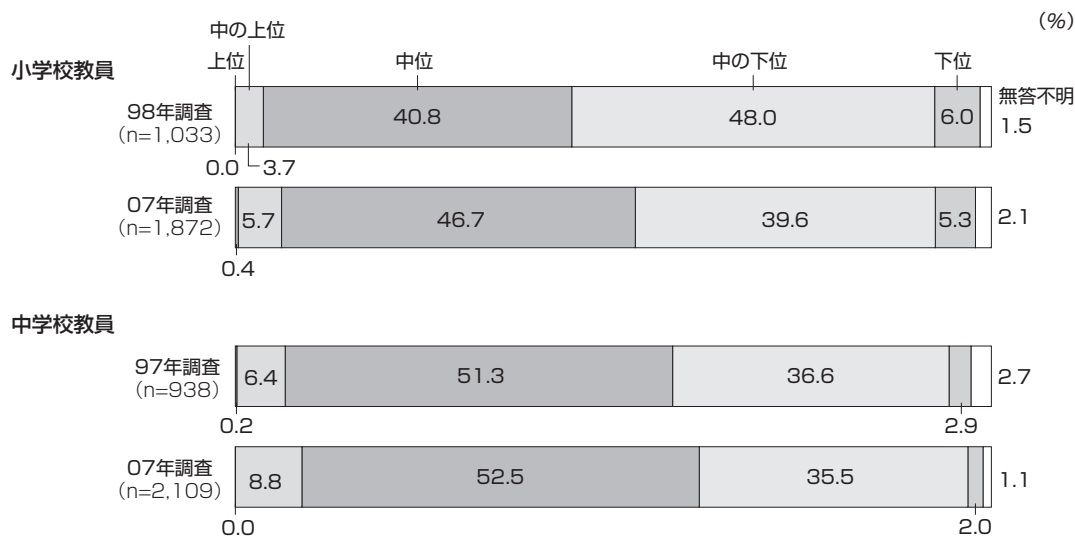
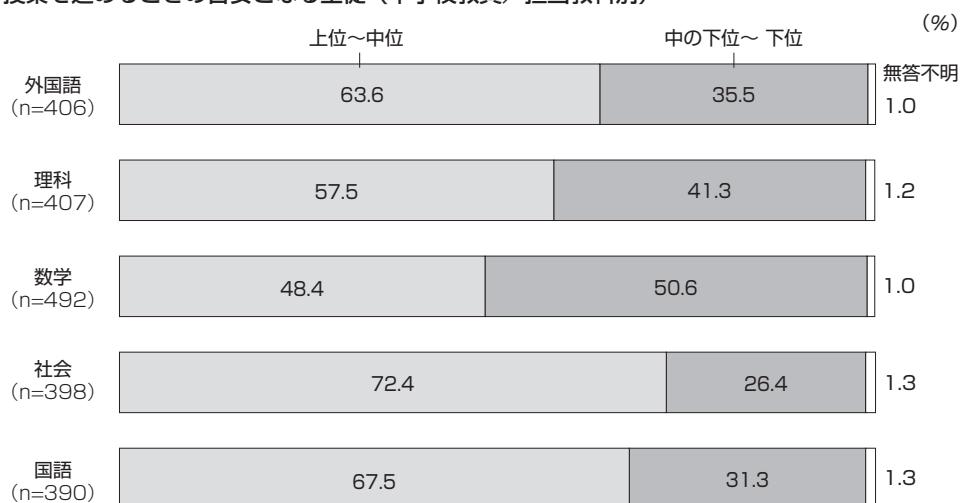


図4-3-3 授業を進めるときの目安となる生徒（中学校教員／担当教科別）



注) 「上位～中位」は「上位」+「中の上位」+「中位」の%。「中の下位～下位」は「中の下位」+「下位」の%。